

- (6) 同集卷四新集続撰失訣雜經錄、大正五五、一一一頁a  
 (7) 同錄卷六西方諸賢賢所撰集、大正五五、一四四頁b  
 (8) 前掲注④同氏著書二六一頁～二六二頁

## 阿毘達磨における触処論

### ——水界と触處の関係——

野々自了

今日まで多くの学者によつてセイロン上座部と有部の教義が比較され、両部派の間に種々の相違点があることが指摘されてゐる。これから述べようとする「水界と触處」の問題も、その相違点の一つである。

セイロン上座部の法集論六四八偈に所触処を定義して

「地界・火界・風界・固・軟・滑・麁・樂触・苦触・重・輕なり。その不可見・有対なる所触が不可見・有対なる身により、或は已触、或は正触、或は応触……是が『色の所触処なる』なり」

と述べ、水界を触處から除いている。更に法集論註はこれを積して、水界は不可見・無対で法處所撰とするのである。この点が、四大種全てを不可見・有対の触處と考える右部の見解と大きく異なるところである。何故、セイロン上座部では水界を無対として触處からはずさねばならなかつたのであるか。この点に関し

て、従来、次のような推論が示されている。

「水の湿 (sineha) の触感を重視しないで水の結著作用 (bandhanatta) を重視した結果、結著そのものは触感し得ないが故に、水界を触處から除き去つたものでなかろうか。」<sup>⑤</sup>しかしながら、これは資料的裏付けに欠ける為、必ずしも決定的なものではない。

この問題に関する資料はあまり多く得ることは出来ないが、本稿はその数少ない資料の中から、この問題に対する両部派の相違の根本原因を探るための一試論である。

セイロン上座部の綱要書 Abhidhammata-sangaha ⑥ tīkā

である Abhidhammatta-vibhāvani の中で、この問題に触れてゐる箇所がある。年代的に見れば後期に属する論書ではあるが、セイロン上座部の伝統的見解であり、問題を解明する為の有力な手がかりとなる。Abhidhammatta-vibhāvani に曰く

「水界の微細なる状態によつて、触ることが不可能であるが故に、『水界を除ける三大種と称せらるる（触、云々）』と（説かれたのである）。たゞえ冷たさが触つて得られたとしても、それは即ち火界である。鈍い暑さの時に冷たさと称されるのは、何らかの徳性の不足の故である。それらは、冷たいという覚の確立せざる状態から知られるのであり、こちら岸と向こう岸の如し。（それは、次の）如くであつて、炎暑時に立つて影に入った為に冷たさの覚があり、そこで長時間立てる為に暑さの覚がある。若し水界が冷たさであるならば、暑い状態と共に一方の聚では（冷たさが）得らるべきであるのに、そのよ

うなことが得られず、それ故に水界は冷たさではないことが知られる。」<sup>(3)</sup>

このセイロン上座部の所説の中では、水界は極めて微細なるものであるから触感し得ないのであるという基本的立場を述べ、それに統いて冷性不存在説が説かれている。即ち「冷たさ」として我々が触るものは、火界である。ただ火界の量が少ないために、我々は「冷たい」と感じるのである。更に又、仮令同一温度の場合でも、我々の身体の状態によつて「冷」とも「暖」ともなり得るから、「冷たさ」は相対的なものである。その結果「水界は冷たさではない」として冷性不存在説を主張しているのである。ところで、水界を触処から除く理由を述べる際に、何故「水界は冷たさではない」と反論しているのであらうか。

そこで、次に冷性存在説を主張する有部について考察してみた。まず順正理論には、セイロン上座部の冷性不存在説とよく似た内容の上座の説が引用され、それに対し衆賢が有部の立場からその冷性不存在説を反駁するのである。そこに於て示された有部の基本的立場とは、「彼冷触水風界增四大果。故是所造色」<sup>(4)</sup>ということである。この立場に立つ限り、セイロン上座部の「水界は冷たさではない」という反論は有部にはあてはまらないことになる。しかしながら、同じ有部の論書において八事俱生説を説明する時、例えは俱含論に曰く、

「水に於ける冷たさという特質によって（火）の温かさも解ると、他の人々は言う。しかし（他のものと）あい難つていなくとも冷たさという特質は存在するであろう。声や受に（それ

자체の）特質がある如くである。」<sup>(5)</sup>

と説かれている。これを称友の註釈によつて解釈すれば、經部の先駆者と伝えられる Srihatta が「水の冷性に強弱があることよつて、そこに少量の暖性の強弱、即ち火界の存在がわかる」と説くのに対して、「冷性の強弱は火界と水界とがあい難つていなくてもあり得るではないか」と世親が反論するのである。

又、同じく、俱含論のこの部分を註釈して、俱含論光記に曰く「冷雖非水是水果故約果頗以此中言冷」<sup>(6)</sup>

更に又、順正理論及び顕宗論に曰く

「於風聚中現有能持起冷緩触三業可得。故知於此有地水火恒不相離。」

この中「起冷」とは明らかに水界の作用を意味しているのである。

先にも示した如く、有部では冷触は水風界の増なる場合の四大の果であるから、冷触は大種ではない。しかしながら、今示したような二、三の資料では、水界と冷性とが非常に密接な関係によつて取り扱われている。セイロン上座部の「水界は冷たさではない」という反論は、有部のこのようない考え方を念頭においてなされたものではないかと考える。

そして、Abhidhammtha-vibhavani は最後に次のような偈を掲げる。

「然るに『水界は湿性であつて、それは又触つて得られる』と説く人々は（次のように）説かるべきである。『湿性と称せられるものは触つて得られると言う、これは尊者たちの増上慢に

すまい。恰も形に於けるが如くである」と。古聖達によつて  
次のように説かれた。

湿性と俱に起つていぬといふの

〔地・火・風の〕三大種に触れて、

湿性を私が触ると

世間の「人は」考える。

それは丁度（三）大種を触つて（その）形を  
心によつて得るが如きであつて、  
それと同じよう個人的経験から、  
私は（湿性）を触るというように  
湿性は識らるべきである。」

## 時機相応の教

廣瀬惺

### 序

人間の現実は課題的である。その現実は自常的所有意識を許さない。まさに人間の現実として課題的なのである。そこに人間の現実が社会的歴史的現実であるといわれる意味がある。

仏陀の出世とは一宗教的偉人の誕生を意味するのではなく、その課題的現実が充分に答えられ、万人が平等に自己を成就する方途が開けた事を意味する。しかしその事の意味が充分明瞭になるには時機相応の教として興起した浄土教を待たねばならなかつた。浄土教とは自己との深いかかわりの中に仏陀出世の意味を問い合わせ、仏教における普遍性、宗教性を開示したものであるといふ。

### 一

人シッタッタが自らを・仏陀と名告つた。この出来事は人たる我々からは謎である。そこに仏陀の死を前にする仏弟子の惑いがあつた。

- ⑥ Abhidharmakosa-bhāṣya, edited by Pradhan, Patna 1967, p. 53
- ⑦ 大正藏經卷四十一・七〔頁a
- ⑧ 大正藏經卷二十九・三三六〔頁b
- ⑨ 大正藏經卷二十九・七八一〔頁b
- ⑩ Abhidhammattha-vibhāvani, Varanasi, 1965, p. 159

然るに仏道は教行証として語られる。それ自体は何かに依つて何かに成らうとする場合の必然的行程であり問題はない。しかしそれが他の一切の行程に及び、仏の教により仏に成る行程であるという事への意味が充分確認されたか。否である。その事は諸先